

長崎大学大学院国際健康開発研究科修了生・学生ネットワーク 「現場の知を伝える」研究会の開催概要報告

鶴岡 美幸¹・吉岡 浩太²・井本 敦子³・岩下 華子⁴・大石 博子・尾崎 里恵
今野 美保⁵・島崎 梓⁶・野上ゆき恵・平野 志穂⁷・松岡 裕子・山口 令子⁸

要旨 長崎大学大学院国際健康開発研究科修了生・学生ネットワークは、2010年の研究科1期生修了時に立ち上がり、2015年5月現在、71名の会員で活動している。その設立目的は、「世界中に散らばる同科修了生および在学生在を有機的につなぎあわせ、知と実践の発展に貢献すること」で、主な活動内容は、①『内部での情報交換』、②『知的交流』、③『外部への情報発信』である。『知的交流』の具体的な活動の一つとして、2011年より毎年、日本国際保健医療学会学術集会の自由集会にて「現場の知を伝える研究会」を開催してきた。第4回となった2014年は、初の試みとして、事前に3組の修了生間でインタビューを行い、その題材をもとに学会自由集会での意見交換を実施する形態とした。研究会当日は30名の参加があり、「現場のニーズ」をどう認識し、定義し、共有するかという問いに、様々な意見が交換された。今後も、本ネットワークが修了生・在学生の有機的なつながりの場として発展しながら、個々の現場での経験を蓄積し、それを互いに共有することで、新しい何かを見いだせるような活動へとつなげていきたいと考えている。

保健学研究 28 : 71-75, 2016

Key Words : 長崎大学国際健康開発研究科修了生・学生ネットワーク, フィールドワーク, 現場の知

(2015年8月27日受付)
(2015年10月21日受理)

はじめに

長崎大学大学院国際健康開発研究科は、国際協力の現場で体系的な知識と技術を有し即戦力となれる人材の育成を目標に掲げ、2008年に独立研究科として設立された。長崎大学大学院国際健康開発研究科修了生・学生ネットワーク（以下、MPHネットワーク）は、2010年の研究科1期生修了と共に立ち上がり、2015年5月現在、71名の会員で活動している。その設立目的は、「世界中に散らばる同科修了生および在学生在を有機的につなぎあわせ、知と実践の発展に貢献すること」で、主な活動内容は、①『内部での情報交換』、②『知的交流』、③『外部への情報発信』である。『知的交流』の具体的な活動の一つとして、2011年より毎年、日本国際保健医療学会学術集会の自由集会にて「現場の知を伝える研究会」を開催してきた。今回は、2014年の研究会での活動内容を中心に、2011年から2013年までの過去3回の活動も含めて、その概要を報告する。

研究会概要

本研究会の趣旨は、①発表者自身が現場での経験を言語化し他者に伝える能力を養う、②発表者の実務経験を題材に集会参加者の意見や経験を引き出すというものであり、実践から知見を導く取り組みとして継続してきた。

第1回は、2011年11月6日に東京大学にて、第26回国際保健医療学会学術集会の自由集会として開催された。研究科内外から37名の参加者があり、修了生2名が研究科修了後に携わるプロジェクトでの経験談を発表し、議論が行われた（表1）¹⁾。題材として、「中米でのシャーガス病対策」と「予防接種プログラムの国際的な潮流」が取り上げられ、プロジェクトの具体的な活動内容について、資金を出資するドナーの意向と、現場でのニーズとの間にギャップが生じうるという点について、議論が交わされた。ドナーの理解が得られず、資金確保難となった際の解決策としては、プロジェクト活動費を安価にするための活動の見直しや、他の資金確保の可能性を

- 1 医療法人葵鐘会小児科
- 2 長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科
- 3 長崎大学国際連携研究戦略本部／長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
- 4 長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点
- 5 株式会社国際テクノ・センター
- 6 日本赤十字九州国際看護大学 成育看護学領域
- 7 認定NPO法人 HANDS
- 8 アイ・シー・ネット株式会社

表1. 過去の研究会の概要

第1回	第26回国際保健医療学会学術集会 自由集会 2011年11月6日 @東京大学 発表者： ・吉岡浩太（JICAニカラグア シャーガス病対策専門家） 「誰が殺虫剤の費用を出すのか？～中米シャーガス病対策プロジェクトの経験から」 ・鶴岡美幸（WHO西太平洋地域事務所 拡大予防接種計画部門フェロー） 「予防接種推進は誰のため？」
第2回	第27回国際保健医療学会学術集会 自由集会 2012年11月4日 @岡山大学 発表者：平野志穂（特定非営利法人HANDS プログラムオフィサー） 「国際保健医療の実践を題材に～国際保健協力が目指すマネジメントとは」
第3回	第28回国際保健医療学会学術集会 自由集会 （国際保健医療学会学生部会との合同開催） 2013年11月3日 @名桜大学 発表者：島崎 梓（国際健康開発研究科1期生） 「現場の「知」を引き出す－国際保健医療を題材に－」

探る等が挙げられた。また、現場でのニーズを現場から発信し、現場で必要とされる活動をドナーに理解してもらうためには、サーベイランスの実施も有用であろうという意見もあった。

第2回は、2012年11月4日に岡山大学にて、第27回国際保健医療学会学術集会の自由集会として開催された。17名の参加者のもと、修了生1名が研究科在学前後に経験したフィリピンでのNGO活動、ガーナでの青年海外協力隊としての活動、日本でのNPO活動から事例提示を行った。発表者からは、それぞれの活動で直面した課題が提示され、それに対する解決策について参加者と共に考え、意見交換を行う時間を作ることができた。ガーナでの女性収入向上活動の事例では、女性が家庭から元手を持ち出すことの難しさが、活動が軌道に乗らないひとつの要因であったが、女性の自立を目指すためだからという理由で、外部者が資金援助は行わなかったという要因もそこに加わっていた。参加者からは、元手だけでも資金援助を行ったらよかったのではないかという指摘もあり、ここでも、現場で必要な活動と、資金提供側との問題認識や価値観を合致させることの難しさが話題のひとつとなった。

第3回は、2013年11月3日に名桜大学にて、第28回国際保健医療学会学術集会の自由集会として開催された。国際保健医療学会学生部会との共同開催となり、関係者11名の参加があった。学生部会とMPHネットワークより、それぞれ1名ずつがフィールドでの経験事例を提示し、MPHネットワーク修了生からは、研究科修了後のケニアとスーダンでのNGO活動での経験が発表された。発表者2名が共に、それぞれのフィールドで感じたという、「現地のニーズとプロジェクト活動の乖離」、「現地の人々にとっての幸せとは何かという疑問」について主に議論された。人々の価値観の違いはあるものの、「健康」の大切さは普遍的であり、相手の文化を尊重しながら

外部者としてできることをしたいという意見や、相手の声に耳を傾け、相手にとって何が必要かを考えることが自分の将来にも繋がるという意見もあった。また、キャリア形成についての疑問や不安も議題にあがるなど、同じ国際保健分野での活動を志す学生と本ネットワーク若手実務者の間での率直な意見交換が行われたことは、合同開催ならではのであった。

第4回となった2014年の研究会企画は、初の試みとして、学会自由集会上に先駆け3組の修了生間での事前インタビューを実施し、そのインタビュー内容を題材に、自由集会において参加者との意見交換を行う形式とした。インタビューは、2014年5月から6月にかけて、カンボジアと日本において3組の修了生の対談として行われた。対象者は、研究科修了後の様々な進路の代表として、NGOでの活動者、コンサルティング会社勤務者、博士課程進学者の3名とし、それぞれの活動経験や現場での悩み等を、他の修了生との対談により引き出すという趣旨で行われた（表2）。

NGOでの活動者のインタビューでは、「人々の健康は生活の中にある」という考えのもと、できるだけ地域に入り込んで人々と生活をともにする中で、彼らの生活環境を実体験し、そこから彼らとともに健康問題について考えるという姿勢が紹介された。また、プロジェクト活動の取り組み方については、いずれその地を去る外部者である自分は、どれだけ「黒子」になって住民自らの活動を陰で支えることができるかが重要である、ということにも触れられた。

コンサルティング会社勤務者のインタビューでは、実務を通して「主体的に将来の目標やビジョンを持って行動することの大切さ」を感じたことや、修士課程で学んだ「文章を適切にまとめる表現能力」が実務に役立つこと等が話題となった。また、コンサルタントにとっては、「専門性を高めることと、幅広いテーマの知識を持つと

表2. インタビュー参加者と各インタビューのキーワードの紹介

2014年5月31日 @プノンペン	尾崎里恵 シェア = 国際保健協力市民の会 地域保健専門家：カンボジア × 大石博子 JICA専門家 助産能力強化を通じた母子保健改善プロジェクト：カンボジア *キーワード：「人々の健康は生活の中にある」「黒子になれるか」
2014年6月8日 @東京	関司令子 アイ・シー・ネット株式会社 JICA母子保健プロジェクトにおけるスーパービジョン・モニタリング専門家：ガーナ × 今野美保 株式会社 国際テクノ・センター マラリア対策におけるJICA無償資金協力の調達・積算担当 *キーワード：「実務を通して感じた重要なこと」「実務で役立つ修士課程での学び」「コンサルタントに必要な能力」
2014年6月20日 @長崎	井本敦子 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 博士課程在籍 × 岩下華子 長崎大学熱帯医学研究所付属アジア・アフリカ感染症研究施設, ベトナム拠点 (2014年PhD 修了) *キーワード：「博士課程」「現場」「コミュニケーション力」

いう双方が必要な能力である」という見解も示された。

博士課程進学者のインタビューでは、「国際保健の現場に戻らずに、学問の分野での活動を続けたいという想いで博士課程に進学した」という進学理由や、良好な人間関係を築くコツとして、「なるべく直接話したり、挨拶だけでもしたりする機会を増やす」という姿勢についても紹介された。また、「現場とは？現場の良さとは？」という話題では、「現場では、援助のあり方について実感を持ちながら考えられる」という点が現場の良さとして挙げられた。

インタビュー内容は、2014年9月よりMPHネットワークのホームページに順次掲載し一般に公開され、Facebook上でも情報が共有された²⁾。

そして、2014年11月2日に国際医療研究センターにて、第29回国際保健医療学会学術集会の自由集会として第4回目の研究会を開催した。研究科関係者24名、その他6名の計30名の参加の他、インターネット通話を利用してベトナムからも修了生3名が参加した。参加者には、事前実施した3組のインタビュー記事を資料として配布し、各インタビューの聞き手となった者が内容の要旨を発表した後に、全体での意見交換をするという進行方法で行った。

意見交換では、まず、「現場とは何か」という問いから、「現場とは、国際保健協力の最終受益者が生活している場だとは限らない」という話題となった。コンサルティング会社で机に向かって仕事をする人にとっては、そこが「現場」となり得るし、保健政策決定に携わる人に

としてはそのオフィスが、「現場」となり得る。つまり、「『現場』とは、各々の立場や考え方により定義されるものである」という点では、参加者皆が共通の認識であるようであった。

次に、議題は「現場のニーズ」へと発展した。NGOを自ら運営する修了生や、国際保健の様々なプロジェクトに携わって来た専門家からは、「現場」の定義が多様である以上、それぞれの「現場のニーズ」も多様性に富むもので、それが必ずしも「受益者のニーズと一致するものではない」という国際保健の現実についての指摘があった。国際保健分野では先進国と途上国、政策と現実など、さまざまな価値観が混在しており、ニーズのギャップがあるのは当然であるが、その中で、各々がどこに価値観を置くかを認識し、対応すべきニーズを「見て、調べて、想像すること」が重要になるという意見も挙がった。一方、自分の価値観が揺らいでニーズが見えなくなることもあるという、協力隊経験者からの発言もあった。途上国の小さなコミュニティに入り込んで、そこでのニーズを集めたかったが、そのなかで、現地の人の考え方に共鳴していき、今あるままでいいのではないか、と思ったという例が共有された。

さらには、議論は「関係者でのニーズの共有の難しさ」という話題にも及んだ。途上国で健康問題の研究に長年携わって来た日本人研究者からは、10年近く仮説を立て、データを分析して、相手国保健省の技官に根気よく何度も説明して、はじめてお互いにやりたいことがわかってきたという例も報告された。



写真1. 第4回現場の知を伝える研究会
(全体の様子)

「現場のニーズ」をどう認識し、定義し、関係者間で共有するか。この難問に対する明確な解答を得ることが果たしてできるのだろうか。参加者各々がそんな思いを抱えながら、しかし、その晴れない思いを参加者皆で共有し、議論することをひとつの励みに、意見交換を終了した。

第4回研究会は、事前のインタビューでの題材をもとに、自由集会での意見交換を実施するという初の試みであった。研究会での発表以前に、対談形式で実務者が経験談を語るという手法を用いたことにより、過去の3回に比し、より掘り下げた内容の経験談を引き出すことができるという利点が見られた。更には、インタビューの詳細記事をインターネット上で公開することで、広く内外へ発信することも可能となった。インタビュー企画の反響は良好で、来年度も実施の方針である。また、自由集会での終了時アンケートからの参加者の声の中には、「ディスカッションを通じて自己の経験を振り返り、他の人と悩みや考えを共有し、自身の今後を考え直す良い機会となった」という感想も見られた。時間と場所を共有し、互いの顔を見ながら直接意見交換をすることが、現場で悩みながら活動する者達にとっての刺激となり、日々の活動への活力となることも再認識することができる研究会となった。来年度以降も試行錯誤を繰り返しながら、研究会を通じて、現場の知をどのように蓄積し、

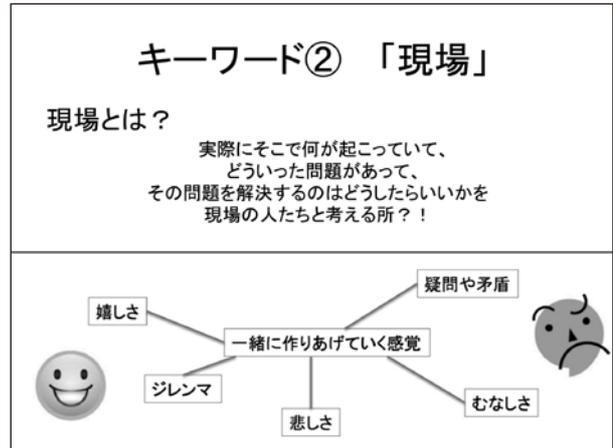


図1. 第4回現場の知を伝える研究会
(発表に用いられたスライド)

実践から知見を導くことができるのかを模索して行きたい。

おわりに

2015年10月より、研究科は留学生を迎えるの新体制を迎える。それに伴い、MPHネットワークは、『長崎大学グローバルヘルス・ネットワーク』へと改称の予定であるが、同時に組織体制の見直しも必要となる。今後は、本ネットワークが世界中から集う留学生とともに、修了生・在学生の有機的なつながりの場として発展しながら、個々の現場での経験を蓄積し、それを互いに共有することで、新しい何かを見いだせるような活動へとつなげていきたい。

資料

- 1) 長崎大学大学院国際健康開発研究科修了生・学生ネットワーク：現場の「知」研究会, http://www.mph.nagasaki-u.ac.jp/doku.php?id=現場の_知_研究会, (2015年8月2日アクセス)
- 2) 長崎大学大学院国際健康開発研究科修了生・学生ネットワーク：MPH修了生インタビュー企画, <http://www.mph.nagasaki-u.ac.jp/doku.php?id=インタビュー企画>, (2015年8月3日アクセス)

The report of the annual conference on field experiences and learning; MPH network of Graduate School of Nagasaki university

Miyuki TSURUOKA¹, Kota YOSHIOKA², Atsuko IMOTO³, Hanako IWASHITA⁴

Hiroko OISHI, Rie OZAKI, Miho KONNO⁵, Azusa SHIMAZAKI⁶

Yukie NOGAMI, Shiho HIRANO⁷, Yuko MATSUOKA, Reiko YAMAGUCHI⁸

- 1 Kishokai Medical Corporation, Pediatrics
- 2 School of Tropical Medicine and Global Health, Nagasaki University
- 3 Center for International Collaborative Research/ Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University
- 4 Vietnam Research Station, Center for Infectious Disease Research in Asia and Africa, Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University
- 5 International Techno Center Co.,Ltd.
- 6 Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing Growth and Development Nursing
- 7 Health and Development Service
- 8 IC Net Limited

Received 27 August 2015

Accepted 21 October 2015

Key words : MPH network of Graduate School of Nagasaki university, fieldwork, field-based learning